令和５年（2023 年）５月号　第 181 号

長崎廻米

本会理事　八木久雄

１、廻米とは

廻米（かいまい）とは、米穀を廻送すること、廻米は、都市化が進み田畑に乏しかった江戸時代の長崎にとって市民の食料確保のためのまさに生命線であった。廻送された米穀は、後述するように長崎の米蔵で厳重に管理され、適宜、米商人に売却された。

２、飢饉による廻米

万治２年（１６５９）２月から７月にかけて飢饉となり米価が高騰した。『増補長崎略史』（以後『略史』と記述）によると[1]、長崎奉行甲斐庄喜右衛門は、九州内の天領の年貢米１万７００石を長崎に廻送させるとともに諸藩にも依頼、米穀１万８０４７俵（石数不明）を廻送させ、市民に貸与した。代銀は、総計９０８貫２９７匁余、当時の市民は４万７００人であったので、１か月４５００石の計算であった。

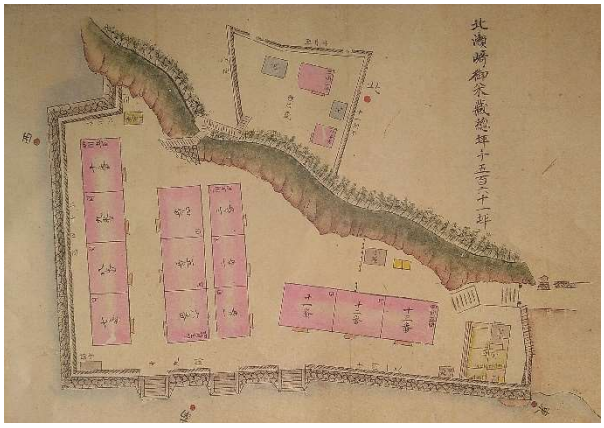
享保１８年（１７３３）にも飢饉があり、米価が日ごとに高騰、米穀１石が銀１５０目、小売りで白米１升が銭１２４文にものぼった。

長崎奉行大森山城守、この山城守は、万治２年の飢饉の際の長崎奉行甲斐庄喜右衛門の孫であったが、『略史』によると[2]、山城守は、東北諸国から米穀１万石を購入、貧民には無料配布、市民には低価にて貸与したので、長崎での餓死者は１人もなかった。

そこで山城守が帰府した際は、数千人の市民が感謝の意を表して一瀬まで見送ったというが、山城守は米穀の購入に貿易準備金の無断流用を咎められ、罷免された。

３、長崎の米蔵

長崎の米蔵は、『長崎市史』[3]によると、延宝３年(１６７５)浜の御蔵と呼ばれた米蔵が現在の江戸町に設けられ、町年寄１人が米方掛を務め、事務等は船番２人が兼務した。



「北瀬崎御米蔵図」（『長崎諸御役場絵図第２巻』）長崎歴史文化博物館収蔵

しかし同米蔵が米穀の出し入れに不便だったため、享保４年(１７１９)瀬崎、現在の西坂町に新たに米蔵が設けられた。

同米蔵は、最初、瀬崎米蔵と呼ばれたが、同９年（１７２４）十善寺郷、現在の梅香崎町に新たに米蔵が設けられると、北瀬崎米蔵、南瀬崎米蔵とそれぞれ区別した（以後「北瀬崎」「南瀬崎」と記述）。

北瀬崎は、敷地１５６１坪、水門３か所、土蔵５棟、詰所１棟、番所１棟が、南瀬崎は、敷地２９９坪、土蔵２棟、詰所１棟があり、それぞれ米蔵預、蔵番、筆者、米見などが置かれた。

なお時代によって増減はあるが、西国天領から毎年長崎に廻送された米穀の内、北瀬崎には豊後米１万５０００石、肥前松浦米２５００石、肥後天草米７０００石が、南瀬崎には天草米や松浦米、さらには長崎天領７か村の長崎米、合計約９０００石が市民の食料用として備蓄された。

長崎の米蔵としては、ほかにも新地米蔵所、囲籾蔵所などがあったが、ここでは省略する。

本稿は令和５年３月例会の「お米の話」の発表要旨である。

---

[1] 「増補長崎略史　上巻」（『長崎叢書三』）長崎市　大正１５年　５５頁

[2] 注（1）に同　　１６４頁

[3] 『長崎市史・地誌編名勝舊跡部』長崎市　昭和１２年　７０５頁～７１４頁